昔むかし、ジャンという若者がいました。ジャンは兵隊のつとめを終えて、国へ帰ろうと、旅をしていました。

ある晩、ジャンは、一軒の家の戸をたたきました。すると、美しい娘が出てきて、「あなたを泊めることはできません。わたしの父は人食いじじいなのです。父が帰って来たら、あなたは食べられてしまいます」といいました。ジャンは、「かまうもんですか。わたしはつかれてたおれそうです」といいました。娘は、「ではしかたがありません。父が、帰って来たら、うまくやってみましょう。わたしは美しいユーラリです」といって、ジャンを中に入れてくれました。

しばらくすると、人食いじじいが帰って来ました。人食いじじいは、大きな目をむいていました。

「生肉のにおいがするぞ。人間の肉のにおいだ」

美しいユーラリは、

「つかれた兵隊さんが、休ませてほしいといっってやって来たの」といいました。人食いじじいは、

「あしたの昼飯に食べるとするか」といって、寝てしまいました。

つぎの朝、美しいユーラリは、人食いじじいに行きました。

「あの人を食べるのは、お父さんの手伝いをさせてからでも遅くはないわ」

そこで、人食いじじいは、ジャンにむかっていいました。

「わしが出かけているあいだに、だんろのまき置き台と、鉄の棒と、自在鉤をみがいて、銀のようにピカピカに光らせるんだ。みがく道具はおまえのつめの先だけだ。

夕方までにやってしまわないと、あしたおまえを食うからな」

そして、人食いじじいは出かけて行きました。

だんろのまき置き台と鉄の棒と自在鉤は、五百年もの間みがいていなかったのだからとすとほりだらけでした。ジャンは、とほうに暮れて、

「これを爪の先だけでみがくなんて、とてもできやしない」といいました。すると、美しいユーラリはいいました。

「わたしをここから連れ出して、結婚するって約束してくださいさる？そうすれば、わたしがあなたに代わって仕事をかたづけあげてあげるわ」

「ああ、約束する」と、ジャンはいいました。

日が暮れるころ、美しいユーラリはだんろにむかっていいました。

「つえの力により、父の命令が果たされるように」

たちまち、まき置台も鉄の棒も自在鉤も、銀のようにかがやき始めました。

人食いじじいは、帰ってくると、ぴかぴかのだんろを見ていいました。

「やあ、よく働いたな」

あくる朝、人食いじじいは、

「わしが出かけているあいだに、わしの馬具をみがいて、金のようにピカピカに光らせるんだ。夕方までにやってしまわないと、あしたおまえを食うからな」といつて、出かけて行きました。

ジャンがとほうに暮れていると、美しいユーラリがいました。

「わたしをここから連れ出して、結婚するって約束してくださる？そうすれば、わたしがあなたに代わって仕事をかたづけ、あげてあげるわ」

「ああ、約束する」

日が暮れるころ、美しいユーラリは馬具にむかつていいました。

「つえの力により、父の命令が果たされるように」

たちまち、馬具は、金のようにかがやき始めました。

人食いじじいは、帰ってくると、ぴかぴかの馬具を見ていいました。

「やあ、よく働いたな。あしたも働いてもらおうぞ」

その晩、美しいユーラリは、ジャンにいいました。

「ぐずぐずしてはられないわ。急いで逃げだしましょう」

ところが、そのとき、となりの部屋で寝ていたおかみさんが、

「夢を見たよ」とさげびました。人食いじじいは、

「どんな夢だ」とききました。

「ユーラリとジャンが逃げようとしている」と、おかみさんがいいました。人食いじじいは、ユーラリの部屋にむかつて、

「美しいユーラリ！」とよびました。ユーラリが、

「なあに、お父さん」と答えると、人食いじじいは、こんどは、

「きたないジャン！」とよびました。ジャンは、

「何ですか。ご主人」と答えました。人食いじじいはおかみさんに、

「ほら、ふたりともベッドにいるよ」といいました。

美しいユーラリは、パイをふたつ焼いて、ベッドの上に並べました。それから、ふたりは、逃げ出しました。

しばらくすると、おかみさんが、また、

「夢を見たよ」とさげびました。

「どんな夢だ」

「ジャンのやつがユーラリを連れて、もう遠くに行ってしまった」
人食いじじいは、

「美しいユーラリ！」とよびました。すると、パイのひとつが、

「なあに、お父さん」と答えました。

「きたないジャン！」とよぶと、もうひとつのパイが、

「何ですか。ご主人」と答えました。人食いじじいはおかみさんに、

「ほら、ふたりともベッドにいるよ。わしらも眠ろう」といいました。

ところが、しばらくすると、またおかみさんが、

「夢を見たよ」とさげびました。人食いじじいは、

「美しいユーラリ！」とよびました。けれども返事がありません。こんどは、

「きたないジャン！」とよびました。やっぱり返事がありません。

「もう眠っちまったんだ」と人食いじじいがいうと、おかみさんが、

「いいや、出て行ったんだ。起きてふたりを追いかけておくれ」といいました。

人食いじじいが、となりの部屋をのぞくと、ベッドはからっぽでした。じじいは馬に乗ってふたりを追いかけました。

美しいユーラリとジャンは、走りに走りました。ユーラリがいました。

「わたしのジャン、何かやって来るのが見えない？」

「馬に乗って走ってくる人が見える」と、ジャンがいうと、ユーラリはいいました。

「お父さんだわ。つえの力により、あなたはなしの木になるなしの実に、わたしはなしの実をもぐおばあさんに！」

たちまち、ジャンはなしの実に、ユーラリはおばあさんになりました。そこへ、人食いじじいが、馬をとばしてやって来て、

「ばあさん、ここを娘と若者が通らなかつたかい」とききました。おばあさんは、

「そうだね。このなしの実をもぐのはひとくろうだよ」といいました。

「そうじゃない。ここを娘と若者が通らなかつたかときいてるんだ」

「そのとおり。このなしはおいしいよ」

人食いじじいは、腹を立ててもどって行きました。

おかみさんは、じじいに、

「見つけたかい」とききました。

「いいや。なしの木があつて、なしの実をもいでいるばあさんに会つただけだ」

「ばかだね。そのなしの実がジャンで、ばあさんがユーラリだよ」

「ようし、もういちど行つて来る。こんどは逃がしやしない」

人食いじじいは、馬に乗ってかけだしました。

美しいユーラリは、ジャンにいいました。

「わたしのジャン、何かやって来るのが見えない？」

「馬に乗って走ってくる人が見える」

「お父さんだわ。つえの力により、わたしは、ばらの木に咲くバラの花に、あなたは庭師になるように！」

たちまち、ユーラリはばらの花に、ジャンは庭師になりました。そこへ、人食いじじいが、馬をとばしてやって来て、

「おい庭師、ここを娘と若者が通らなかつたかい」とききました。庭師は、

「いいや、玉ねぎの種は売らないよ」といいました。

「そうじゃない。ここを娘と若者が通らなかつたかときいてるんだ」

「ああ、にんじんの種なら売るよ」

人食いじじいは、腹を立ててもどって行きました。

おかみさんは、じじいに、

「さあそれで、ふたりを見つけたかい」とききました。

「いや。バラの花があつて、庭師に会っただけだ」

「ばかだね。そのばらの花がユーラリで、庭師がジャンだよ。こんどはわたしが行ってつかまえてくる」

おかみさんは、馬車に乗って追いかけてきました。

美しいユーラリは、ジャンにいました。

「わたしのジャン、何かやって来るのが見えない？」

「馬車が来る、とんでくる、とんでくる」

「じゃあ、こんどはお母さんよ。つえの力により、あなたは池に、わたしはあひるになるように！」

たちまち、ジャンは池になり、ユーラリはあひるになって池に浮かびました。そこへ、おかみさんが、やって来て、パンをちぎって投げながらいいました。

「きれいなあひるさん、こつちへおいで」

あひるは近付いてきて、パンをつまんでさつと逃げました。おかみさんは、まほうのつえをふり上げて、あひるの背中を打とうとしました。そのとき、あひるはつえをくわえたかと思うと、おかみさんの手からもぎ取って、水にもぐってしまいました。おかみさんは、つえをなくして、まほうの力を失ってしまいました。

「美しいユーラリ、つえを返しておくれ！」

おかみさんはさげびましたが、どうにもなりません。泣きわめきながら帰って行きました。

ふたりは、ジャンの国に向かいました。家の近くまで来たところで、ジャンはいいました。

「親たちを驚かせないように、ぼくが先に帰って、あなたが来ることを知らせよう」
美しいユーラリは、

「ええ、いいわ。でも、家に着いたら、だれにもキスさせないと約束してね。だれかがキスしたら、あなたはわたしをわすれてしまうから」といいました。

ジャンが家に帰り着くと、親たちは大喜びしました。

ジャンは、疲れていたので少し横になりました。すると、母親がそつと近づいて、キスしました。そのとたん、ジャンは、美しいユーラリをわすれていました。ユーラリが家にやって来ても、ジャンは思い出すことができませんでした。

美しいユーラリは、あきらめて、村はずれの小さな家で、ひとり暮らすことになりました。

さて、この国の領主には、息子が三人いました。息子たちは、窓辺に立つ美しいユーラリを見つけ、妻にしたいと思いました。

ある晩、上の息子が、ユーラリの所へ結婚を申しこみにやって来ました。いくら断っても上の息子があきらめないで、ユーラリは、いいました。

「じゃあ、だんろの火種を灰の中に埋めてくださいな」

上の息子が、火種を埋めにかかる、ユーラリは、つえをつかんでいいました。

「おまえは、火を埋め

火を起こし

ひと晩じゆうやっているように」

ユーラリが、寝室で眠っているあいだ、上の息子は台所で、ひと晩じゆう、火種を埋めたり起こしたりしていました。そして、夜が明けると、がっかりして帰って行きました。

そして、こんどは、二番目の息子が、ユーラリの所に結婚を申しこみにやって来ました。ユーラリは、

「まどから雨が入らないように、まどガラスを閉めてくださいな」といいました。

息子がまどを閉めにかかる、ユーラリは、つえをつかんでいいました。

「おまえは、まどを閉め

まどを開け

ひと晩じゆうやっているように」

ユーラリが、眠っているあいだ、息子は、雨でずぶぬれになりながら、ひと晩じゆう、まどを閉めたり開けたりしていました。

つぎの晩、三番目の息子が、結婚を申しこみにやって来ました。息子があきらめない、ユーラリはいいました。

「じゃあ、とびらにかんぬきをかけてくださいな」

そして、つえをつかんでいいました。

「おまえは、かんぬきをかけ

かんぬきをはずし

ひと晩じゆうやっているように」

ユーラリが、眠っているあいだ、息子は、ひと晩じゆう、かんぬきをかけたりはずしたりしていました。

三番目の息子ががっかりして家に帰ると、兄さんたちが、

「うまくいったかい」とたずねました。

「とんでもない。ひと晩じゆう、とびらのかんぬきをかけたはずしたりしていたんだ」

三番目の息子が答えると、兄さんたちもいいました。

「ぼくは、ひと晩じゆう、まどを閉めたり開けたりしてたんだ」

「ぼくは、ひと晩じゆう、火種を埋めたり起こしたりしてたんだ」

三人は、こんなひどい目に合わせたユーラリに、仕返しをしようと相談しました。

しばらくすると、ジャンが村の娘と結婚することになり、三人の息子たちも招待されました。そこで、三人は、仕返しのチャンスだと思って、美しいユーラリを結婚式にまねくよう、ジャンにすすめました。

結婚式の日、やって来た美しいユーラリは、おひさまのようにかがやいていました。ユーラリは、ジャンのとなりにならぬと、持って来たパイをふたつ、テーブルにならべました。パイは小さな声で話し始めました。

「わたしのジャン、あなたがとても疲れていたとき、泊めてあげたお父さんの家のことを覚えている？」

「いや、覚えていない」

「わたしのジャン、あなたがみがくようにいつかあって、わたしが銀のようにみがいてあげただんろのまき置台と鉄の棒と自在鉤を覚えている？」

「いや、覚えていない」

「わたしのジャン、わたしたちが逃げ出して、あぶない目にあつたことを覚えている？」

「いや、覚えていない」

「だれにもキスさせてはダメっていったことも覚えていないの？」

「思い出した！美しいユーラリ。思い出したよ」

ジャンはすぐに立ち上がって、母親にたずねました。

「ぼくは、戸棚のかぎをなくして、新しいかぎを作ってもらいました。ところが、そのあとで、古いかぎを見つけました。ぼくはどちらのかぎを使えばいいでしょう」とすると、母親は、

「古いかぎですよ。よくなじんでいるから」と答えました。そこで、ジャンはいいました。

「ぼくは、ぼくの命を救ってくれたこの美しいユーラリと結婚の約束をしていました。いちど見失って、今また会うことができました。ぼくは、ユーラリと結婚しなくてはなりません」

こうして、美しいユーラリとジャンは結婚しました。お祝いは七日七晩続きました。

みんながおどった、老いも若きも

八十五歳で

子やぎのようにはねまわる

バルビシオン母さんにいたるまで